



・オタ元人♡シエタワ  
 ・#1は由にうちの子の実生しないハル菜の一部を書き出す  
 ・ふあぽりつくおさつち方々(訂)：「fav：16」  
 ・感謝やしいいなも茨山ありがえうございしました！

■発行  
 まきの(mak\_ino)

■Special Thanks

■逆井と鶴崎  
 「お嬢さんと何かあったんですかい」  
 ふいにかけられた声が思いの外こちらを見透かし  
 いて、一瞬顔がこわはる。  
 「はは。そんな風に見えただか」  
 無理やり空気を揺らしてみたが、白々しいほどに  
 乾いていた。嗚呼、らしくない。  
 「ええ。私は花も坊ちゃんも、よく見てきました  
 からね」

■シグマと長男  
 じっけん。シグマは表情一つ変えずに、兄弟の  
 発した言葉をそのまま繰り返した。  
 「少しばかり貸してくれただけで良いよ。大丈  
 夫、壊れたら元に戻すさ」  
 「だめ」  
 「おや、どうしても？」  
 「うん」  
 「残念」  
 踵を返した兄の顔が、徐ろにドロリと溶ける。  
 「あ……まぢがえた」

■シグマと長男  
 じっけん。シグマは表情一つ変えずに、兄弟の  
 発した言葉をそのまま繰り返した。  
 「少しばかり貸してくれただけで良いよ。大丈  
 夫、壊れたら元に戻すさ」  
 「だめ」  
 「おや、どうしても？」  
 「うん」  
 「残念」  
 踵を返した兄の顔が、徐ろにドロリと溶ける。  
 「あ……まぢがえた」

■透夜  
 あの馬鹿猫は、どうしてあも恥ずかしげなく口  
 に出せるのだろうか。  
 そんな風に思えたのは、彼女を家に送り届けてか  
 ら随分経った頃だった。  
 「可愛い」  
 初めて見る恰好だった。  
 「……可愛い」  
 一言目は気付いたら溢れていて、二言目は目を合  
 わせられなかった。

■オズヴェルとテオドール  
 「恋ですすか、オズヴェル」  
 「唐突な物言い、にむせ返る。不意をついた張本人  
 は突然という、何一つ悪気のない様子で叩方を  
 していた。  
 「テオドール殿、何を」  
 「私は弟の味方ですから、応援はできませんよ」  
 あいつによく似た顔が愉しげに笑う。  
 「……どうやら少々避けられたらしい」

■影丸と依代だった犬  
 「君には感謝してもしきれない」  
 君だってもっとあなたの方と触れ合いたかったらう  
 に。  
 「彼女は無事に過ごしているよ。これからもし  
 れは変わらない」それが本来あるべき生き物の形な  
 のだから。  
 「影丸は静かに目を閉じ、眠る暇へ想いを馳せた。  
 「おやすみ、影丸」

■逆井とメイド  
 妻の使いで来たというメイドが、てきばきとテ  
 イーセットを並べながら言う。  
 「奥様、この頃はよくお笑いになるのです。お  
 食事も、以前よりは召し上がるようになりまし  
 たわ」  
 彼女も頼れたんだらうね、と何の気なしに返答  
 すると、いいえ、と首を振られた。  
 「旦那様のお陰ですわ」

■shell 「in summer」  
 よほど珍しいのか、アレクは海に入る前からず  
 っと浮き輪を回して遊んでいて。  
 「それ持つて海に入ったら、もっと楽しいよ」  
 「本当？何だかどきどきするなあ」  
 白セーラーが夏の日差しを弾く。熱と湿度を孕  
 んだ潮風が、師を埋めた。  
 ■shell 「小さな護衛さん」  
 ふと、今日は視界が拓けているなと思った。何  
 故だろうと考える。  
 「どうした？」  
 「考え事ですか？」  
 両脇から、聞きなれない、なのに耳に馴染む二  
 つの幼い声が聞こえて、ああそうかと気が付い  
 た。  
 私はいつもの、あの背中に守られていたのだ。

■shell 「悪魔」  
 先ほどから、アレクが落ちて着かない様子が短い  
 ズボンの裾をいじっている。  
 殆ど肌を見せない軍服を着ていることが常であ  
 ったからか、違和感が消えないのだから。  
 視線をやると、本当にそれに戦えるのかと疑い  
 たくなるような白く細い足が、もじもじと揺れ  
 た。

■shell 「悪魔」  
 先ほどから、アレクが落ちて着かない様子が短い  
 ズボンの裾をいじっている。  
 殆ど肌を見せない軍服を着ていることが常であ  
 ったからか、違和感が消えないのだから。  
 視線をやると、本当にそれに戦えるのかと疑い  
 たくなるような白く細い足が、もじもじと揺れ  
 た。

■shell 「キリエ・エレyson」  
 ほどこいて、編んで、ほどこく。  
 さっきからシグマの髪で好き勝手遊んでいるが、  
 彼(彼女?)は何も言わない。  
 いつも通りの笑顔で見守ってくる。つまらない  
 ような、安心するような、変な気分だ。  
 何だか悔しくて、だぼついた袖を引っ張ってや  
 った。

■shell 「霧の幻」  
 何かの拍子で大人になったアレクと、子供にな  
 ったオズヴェルを前にして、何を思ったのか着  
 せ替え遊びを始めたのだから、我ながら図太い  
 神経だと思ふ。  
 用意した服は、どれもどこかで見たことがあつ  
 た。  
 家の中で、ちょっとしたファッションショーが  
 始まる。

■shell 「フリフリの服」  
 ふわりとスカートを揺れる。  
 フリルのついた袖口から見える手は、何だかい  
 つもより華奢に見えた。  
 「ね、ねえ。もう着替えてもいい？」  
 もう少しだけ。にっこり笑ってみせれば、アレ  
 クは赤い顔で小さく唸った後、わかった、と潤  
 んだ瞳でこちらを見た。

■shell 「学生気分」  
 「何故、俺までこんな恰好を……」  
 しきりに眼鏡を外そうとするオズヴェルを、ア  
 レクと一緒になつてわあわあ止めた。  
 「駄目ですよ、オズヴェルさん！眼鏡は先生の  
 制服の一部なんだそうです！」  
 素直すぎるうちの悪魔が、あまりに真剣な顔で  
 言うものだから、思わず吹き出してしまった。

■shell 「σ」  
 小さくなったからといって、表情筋が活発にな  
 るわけではないらしい。  
 子供はもっと子供らしく、分りやすくしてくれ  
 なくては困る。  
 何のかんどのぶつくさ言いつつ、いくらかつつ  
 きやすい位置にきた菱形をついていいると、ぬ  
 るりとした「何か」が指に触れた。

■2014 April Fool's Day  
 「忘れられるはずがない」  
 抱き締めたのか、抱き締められたのか。  
 とにかく堪らず駆け寄ってしまったのは、お互  
 い様のようだ。  
 「全部思い出した」  
 泣きそうな声が、夢を霧の中へ追いやった。  
 嘘のような一日が、溶けていく。